

付篇

周防西部・東部における弥生時代後期から古墳時代初頭の土器編年

田畑 直彦

1. はじめに

山口県においては、山本一朗氏(山本1979・2003・2005)、乗安和二三氏(乗安1990)、吉瀬勝康氏(吉瀬1996)、石井龍彦氏(石井2004)により、弥生時代後期から終末期の編年案が提示されている。しかし、他府県と比較して良好な資料が不足しているため、土器編年が立ち遅れている感は否めない。筆者もかつて弥生時代後期後半から古墳時代初頭の土器編年案、弥生時代後期から終末期の土器編年観を提示したが(田畑2001b・田畑2006)、十分なものではなく、その後の資料の増加等によって、補足・修正が必要になった。今後の検討の余地も多いが、以下では、山口県東部(周防)を対象とし、土器様相の異なる西部・東部別の弥生時代後期から古墳時代初頭の土器編年案を提示したい。編年の大枠は乗安氏・石井氏の編年案に準じたものであるが、今回、一部の資料、器種の位置づけ、併行関係について再検討を行った。

2. 編年の指標

1996年、松山市文化財センターで開催された古代学協会四国支部第10回松山大会では、『弥生後期の瀬戸内海－土器・青銅器・鉄器からみたその流域と交通－』がテーマとなった。このうち、第1テーマとして、「土器からみた弥生後期の瀬戸内海」が取り上げられ、福岡県(筑前)から大阪府(河内)に至る弥生時代中期末から終末期に至る土器編年案と併行関係表(田崎1996a)、搬入・模倣されたと考えられる資料についてのコメント表が示された。山口県においては、吉瀬勝康氏が土器編年を担当したが、当時は現在よりも資料が少なかったため、他地域と比較して大まかな編年案が提示されるにとどまった(吉瀬1996)。上記大会で提示された土器編年案と併行関係表について、筆者は中期末と後期初頭、終末期に検討の余地があると考え、大枠については現在でも有効と考える。よって、今回の編年にあたっては、他地域との併行関係や交流状況を把握するため、同編年案^{並行}に対比させたい。

周防の弥生土器は隣接地域からの影響等による地域色を持つため、筆者は、西部(旧吉敷郡・佐波郡)、東部(旧大島郡・玖珂郡・熊毛郡・都濃郡)に分けて土器編年を行う必要があると考えている。西部では弥生時代中期に須玖系土器が分布し、後期に至っても北部九州から一定の影響を受けるほか、瀬戸内系の土器も見られるなど、複雑な様相を呈する。東部は西部と比較して北部九州の影響が少なく、愛媛県中予地域(以下中予地域)との交流が密である。このため、周防内においても土器の比較が難しい場合がある。しかし、高坏は他の器種と比較して型式変化が明瞭な上、比較的地域色が少ないため、北部九州及び山口県内における併行関係の基準とすることができる。また、複合口縁壺など一部の器種では中予地域と近似する点が多いため、これらを併行関係を求める根拠とした。

3. 弥生時代中期末から後期初頭の土器の位置づけについて

筆者が周防・長門の弥生時代中期の土器編年案を発表した際(田畑2004)、中期Ⅳ期の土器には宮ヶ久保遺跡出土土器などに北部九州の高三瀨式併行の土器が含まれているとの指摘を受けた。しかし、周防・長門においては良好な一括資料に恵まれないこともあり、現時点では須玖Ⅱ式(新段階)と高三瀨式(古段階)の土器及び各々に伴う在来系土器を識別することは難しい。また、弥生時代中期に盛行す

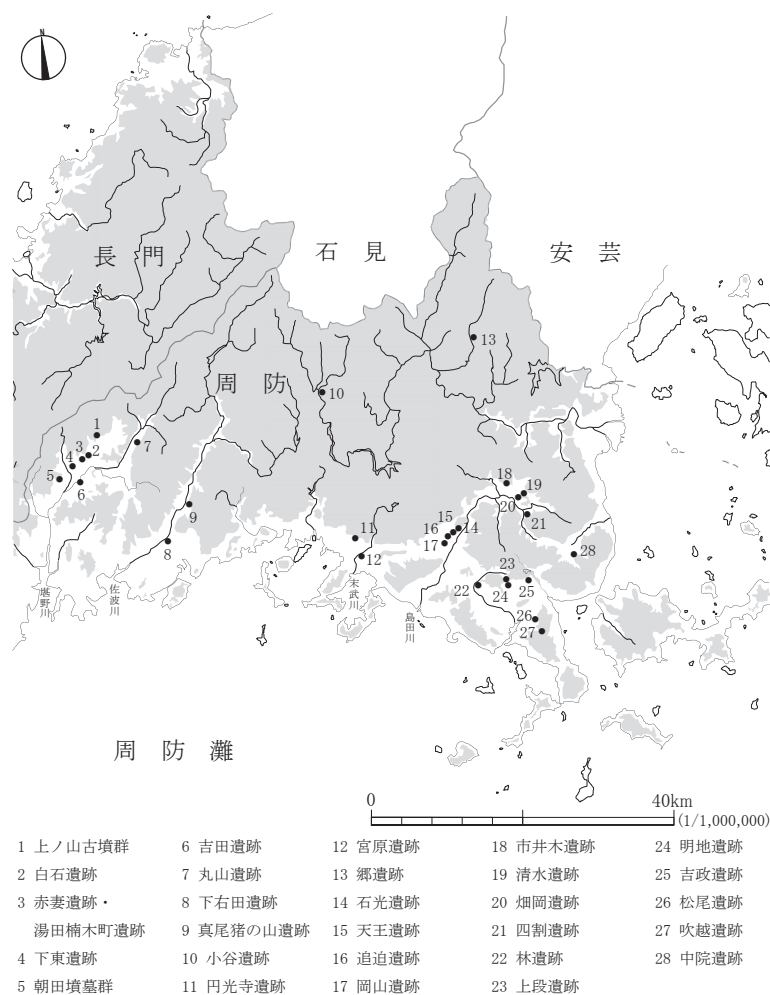


図 113 関連遺跡分布図

る垂下口縁壺が衰退・消滅するのは次段階であることから、筆者はここに画期を認め、後期Ⅰ－1期とした。須玖Ⅱ式(新段階)から高三瀦式(古段階)の間は土器の変化に漸移的な部分があり、実際、山口県の土器と関係の深い遠賀川以東地域の須玖式土器においても、研究者間で位置づけに判断が分かれる資料もある。古代学協会四国支部第10回松山大会の併行関係表で提示されている通り、画期が認められるのは次の高三瀦式古段階と新段階の間である。

また、周防と伊予との併行関係を考えると、筆者は田崎氏(田崎1998)が指摘したように、高三瀦式古段階と瀬戸内のⅣ期の土器が併行する可能性が高いと考えるが、未だ「福岡県下で中期後半の須玖Ⅱ式土器に、瀬戸内Ⅳ期の典型的な凹線文土器は伴出していない」(梅木

2004b)ため、確定はできない。以上の問題の解決には、良好な資料の蓄積を待つよりほかない状況である。本稿の編年案では、古代学協会四国支部第10回松山大会で提示された土器編年案との併行関係を提示するが、上記の通り、中期末から後期初頭の位置づけについては、今後の検討が必要と考えている。

なお、以下の編年案の提示にあたっては、土器に全形が不明なもの、変遷が不明瞭なものも見受けられることから、細かな器種分類は行わず、代表的なものを対象として行いたい。

4. 周防西部の編年

中期末

山口市吉田遺跡第Ⅰ地区A区ピット(豆谷1993)、山口市下東遺跡第1号溝状遺構(磯部1992)出土土器を基準資料とする。また、真尾猪の山遺跡SB1出土土器(谷口ほか2007)もこの段階に位置づけられる。周防独自の垂下口縁壺、遠賀川以東系の影響を受けた須玖系土器から構成されるが、下東遺跡第1号溝状遺構、真尾猪の山遺跡SB1のように、須玖系土器のみを出土する遺構もある。須玖系土器は遠賀川以東系の特徴を持つ須玖Ⅱ式新段階から高三瀦式古段階併行のものである。

後期Ⅰ－1期

垂下口縁壺が衰退・消滅する段階である。少量の資料ではあるが、山口市丸山遺跡1号土壇出土土器(山口市教育委員会1982)を基準資料とする。垂下口縁壺は垂下部が小さいもの(図119-1)、ヨコナ

デにより口縁部上端が立ち上がるもの(図119-3)が見られる。口縁部上端が立ち上がるものは内折口縁壺^{註3}の影響で中期前半に見られるほか、以後も散見される。このため、いちがいいには言えないが、この段階のものは、北部九州系もしくは瀬戸内系土器の影響を受けた可能性がある。資料の増加を待ちたい。また、小片であるが、6条のヘラ描沈線を持つ後期初頭の瀬戸内系長頸壺の頸部片(図115-4)がある。その他の器種、北部九州系土器の様相は不明である。

後期Ⅰ-2期

複合口縁壺が成立する段階である。防府市下右田遺跡SK990、SD221出土土器(原田1999)を基準資料とする。また、下右田遺跡SD630出土土器(本山2003)もこの段階の資料を含む。北部九州系・瀬戸内系土器で構成される。北部九州系の壺(図119-8)は鋤先口縁が袋状を呈し、上に立ち上がる形態となる。これは後述するように、高三瀦式新段階の袋状口縁壺の影響を受けたものと考えられる。よって、前稿では下右田遺跡SK990出土土器を後期Ⅰ-1期としていたが(田畑2004)、後期Ⅰ-2期に位置づけを変更する。瀬戸内系土器には拡張した口縁部に擬凹線文(図119-10)凹線文(図115-10)を施す壺が見られる。そして、口縁部の立ち上がりが未発達な複合口縁壺(図119-9)が出現する。

ここで複合口縁壺の成立過程について周防東部を含めて考えてみたい。周防においては、初源形態の複合口縁壺として、周南市円光寺遺跡第4号土壙出土の壺(図114-4)が知られている。従来、複合口縁壺は、前述した立ち上がりを持つ垂下口縁壺が祖形と理解されることが多かった^{註4}(山本1979・乗安1990)。しかし、垂下口縁壺は後期Ⅰ-1期で消滅してしまう。また、図114-4の口縁部は、大きく広がる口縁部を持つ垂下口縁壺とは形態が異なっており、直接の関連は考えにくい。筆者は、北部九州系土器、瀬戸内系土器とも口縁部に立ち上がりを持つことから、初源期の複合口縁壺の口縁部形態は北部九州系・瀬戸内系土器の影響を受けたものとする。また、この段階から後期Ⅱ-1期の複合口縁壺の口縁部・頸部には沈線を持つものが主体である(図114-4~7)ことから、直接的には瀬戸内系長頸壺の影響が大きかったと推測する。

瀬戸内系長頸壺は周防全域において散発的に出土している。このうち、図115-1~4・9は形態が岡山県の上東式に近似している。しかし、垂直に近い角度で立ち上がる口縁部形態、3のように沈線間に刺突を施す点は上東式と異なる。また、1・9のように内面にケズリを施さないものも存在する。以上の点からこれらは搬入品ではなく、模倣品と考えられる。一方、10は口縁部に凹線を施し、内面に顕著なケズリが認められることから搬入品の可能性が高い。器形・文様等の特徴から広島県(備後~安芸)付近からの搬入が考えられるが、詳細は不明である^{註5}。

次に上記の土器の併行関係について述べる。北部九州系土器で長門・周防と関係が深いのは豊前地域の土器であるが、この地域では後期Ⅰ-1期に袋状口縁壺はほとんど出土せず、後期Ⅰ-2期(高三瀦式新段階)から出土例が増加する(田崎1996)。以上から、北部九州系土器は高三瀦式新段階に併行すると考えられる。また、下右田遺跡第Ⅲ地区旧河川跡砂層土器群1(山口県教育委員会1979)では、瀬戸内系長頸壺(図115-9)とKIVb式ないしKIVc式(橋口1979)に比定できる大型甕が相伴している。KIVbないしKIVc式の甕棺は高三瀦式新段階に伴う(田崎1996b)。また、周防でこの時期に出土している瀬戸内系長頸壺は平井編年(平井1996)の後期Ⅰ-2期の土器との関連が考えられるので^{註6}、併行関係に矛盾はない。よって、図114-1~4は同時期に存在したと考えられる。後期Ⅰ-2期においては、中予地域においても、凹線文系土器が見られる。また、複合口縁壺が大型品に出現すること、形態や文様等に共通する点が多いので(梅木1996b)、上記の過程による複合口縁壺の成立範囲は周防西部から中予地域に及んでいた可能性がある。しかし、中予地域の初源期の複合口縁壺には頸部に貼付

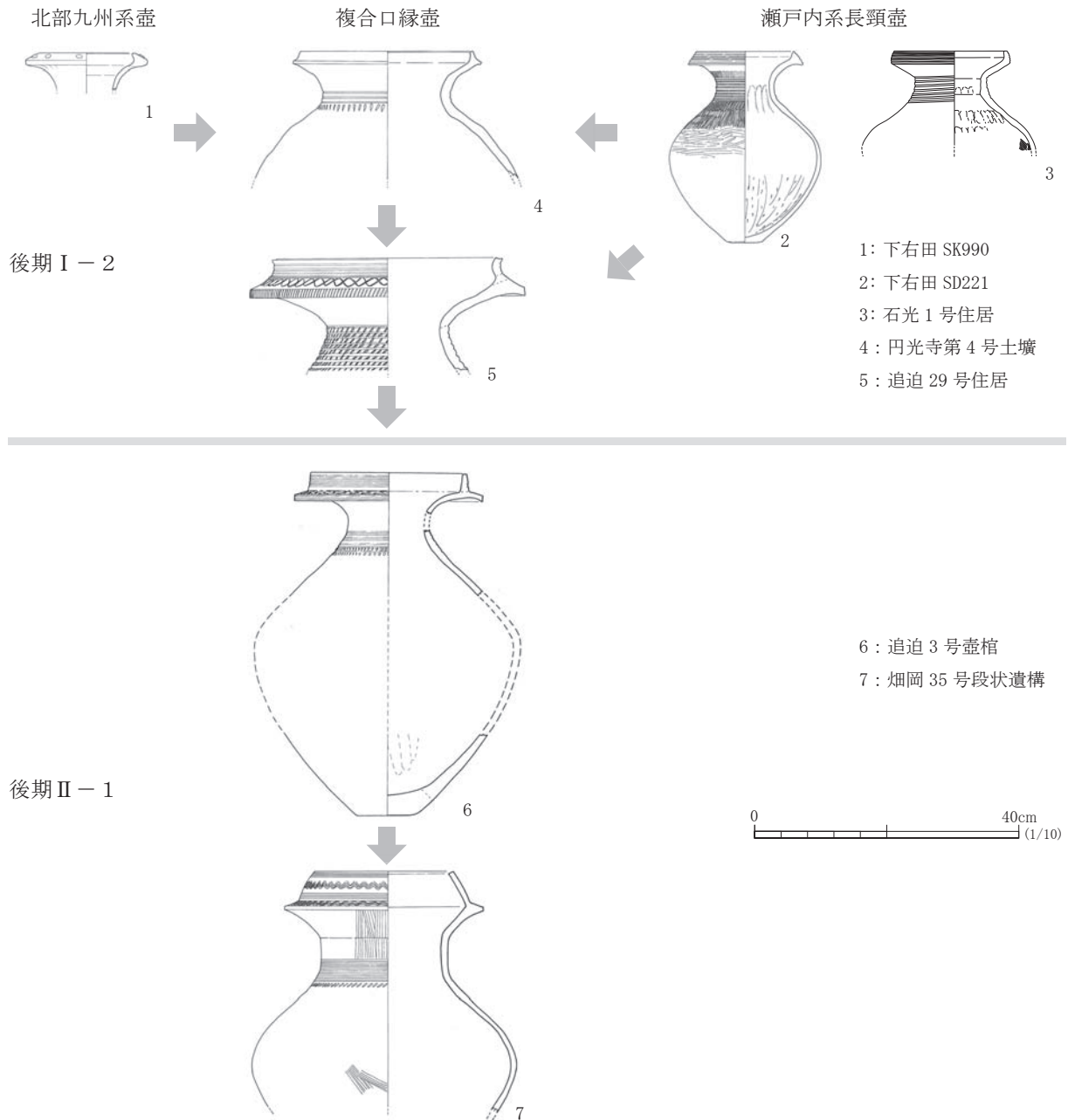


図 114 複合口縁壺の成立過程

突帯を持つものも存在するので(梅木1996b)、防予系複合口縁壺の成立には複数の系譜が存在したのであろう。

甕は瀬戸内の甕(図119-12)、「く」の字口縁で肩が張る胴部を持ち、刺突文を施すもの(図119-13)がある。

鉢・高杯の遺構に伴う資料はない。高杯は口縁部が屈曲して短く立ち上がるもの(図119-14)が存在すると考えられる。

後期 II - 1 期

複合口縁壺が定型化する段階であるが、資料不足により詳細は定かではない。周防東部の状況を参考にすると、複合口縁壺には口縁部・頸部に多条沈線を持つもの(図119-15)が存在すると考えられる。また、北部九州系(下大隈式古段階)の複合口縁壺が存在することも予想される。

この段階の資料として、特殊な資料であるが、下右田遺跡14号住居跡出土土器(山口県教育委員会1973・図119-16~20)をあげておきたい。同住居跡出土土器は山陰系土器(図119-18・19)、豊前系高杯(図119-20)、在来系土器として少量の短頸壺、長頸壺、甕で構成される。山陰系・在来系とも甕の内面にはケズリが施される。山陰系土器は羽場遺跡SB-4・8出土土器(乗安ほか1989)と近似する。

後期Ⅱ-2期

複合口縁壺の盛行期である。基準資料として、下右田遺跡SI695出土土器があるが、資料不足により詳細は不明が多い。壺の様相は不明である。甕には「く」の字口縁のものがある(図119-21)。高杯(図119-22)は屈曲部から口縁部が短く外反するもので、後述するAタイプに相当する。また、坏部が椀状のもの(図119-23)もある。その他、受部に角状の特記を持つ支脚(図119-24)が出現する。

終末期Ⅰ期

壺・甕の胴部中位が張り出すとともに、丸底化が進行する段階である。基準資料として下右田遺跡SI1030・1049出土土器(原田1999)がある。また時期幅を持つが、吉田遺跡本部2号館第1号土壙出土土器(河村1990)、下右田遺跡SD240出土土器、SD260出土土器(原田1999)がある。

筆者はかつて吉田遺跡本部2号館第1号土壙出土土器を後期後半を主体とする資料と位置づけた(田畑2001b)。しかし、その後、同資料は後期後半から終末期前半に位置づけられている豊前地域の高島式土器(小田1976)に近似しているのではないかと指摘を受けた。そこで、高島式の基準資料で終末期前半に位置づけられている高島遺跡第2遺構出土土器と吉田遺跡本部2号館第1号土壙出土土器を図上で比較してみたい。高島式土器は、複合口縁壺口縁部の施文、長頸壺、鉢、「半胴長胴外反口縁」の甕(図116-9)、高杯に東九州の要素が強く認められ、土井ヶ浜Ⅳ式、吹越遺跡出土土器との共通性も指摘されている(小田1976)。また、「深皿状坏複合外反」の高杯(図116-15・16)、「丸底球胴外反口縁引き調整」の甕(図116-10・11)に北部・中部九州との「緊密な関係」が指摘されており、「瀬戸内から東九州に足がかりをもつ土器群」、「北部、中部九州に広く分布するにいたった土器群」、「福岡地方の終末期土器と緊密な関係をもつ土器群」の組み合わせで設定された(小田1976)。

まず、複合口縁壺を見ると、複合口縁部が中位で屈曲して立ち上がる形状、端部の折り曲げ(図116-2・4~6)口縁部の施文[無文のもの(図116-1・2)、波状文を持つもの(図116-4~6)]、斜めないし直立する頸部の形状が吉田遺跡出土土器と共通する。一方、甕においては、高島式土器が胴部外面にタタキを施すものがあるのに対して、吉田遺跡出土土器にはなく、短い「く」の字口縁を持ち、胴部が強く張り出す甕(図117-8・9)が見られる点が異なる。

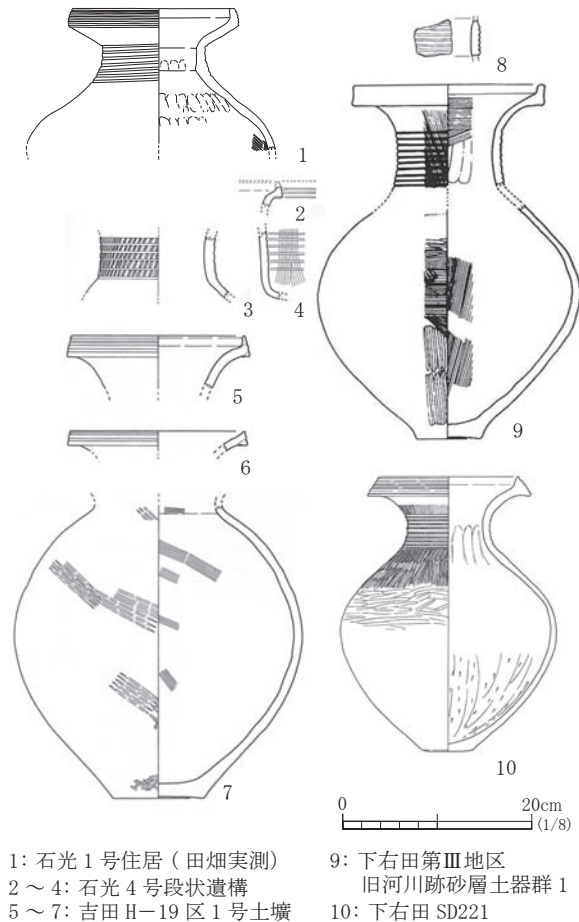


図 115 後期Ⅰ-1~2期の瀬戸内系長頸壺

高杯においては、高島式土器が屈曲部から口縁部が緩やかに外反するもの(図116-15・16)であるのに対して、吉田遺跡では、Aタイプ:屈曲部が鋭く口縁部が短く外反するもの(図117-15・16)、Bタイプ:高島式土器と近似した口縁部を持つもの(図117-17~20)、Cタイプ:Bタイプよりも口縁部が長くなり、屈曲が緩やかになるもの(図117-21・22)がある。Aタイプは筑前の下大隈式新段階・北豊前のⅣ期、Bタイプは西新町式古段階・北豊前のⅤ期、Cタイプは西新町式新段階・北豊前のⅥ期に見られるものである。AタイプからCタイプへの変遷は下右田遺跡、長門の土井ヶ浜Ⅳ式(坪井1968)、柳瀬遺跡(濱崎1997)でも認められる。周防東部では、後述するように中予地域の影響を受けた高杯が見られるため注意が必要であるが、豊前の影響を受けたと見られる高杯が吹越遺跡、吉政遺跡で出土しており、近似した変遷をたどることができる。

一方、裾部の形態を見ると、高島式土器には内湾しながら立ち上がるもの(図116-15~18)があるが、吉田遺跡出土の高杯裾部(図117-24~26)も端部の形態は異なるものの、同様に内湾しながら立ち上がる。以上から、壺・高杯には近似した形態が多いと言える。山口県内では、秋根遺跡LK128から高島式の壺(伊東ほか1977)、川棚条里跡から椀形高杯(藤本2000)が出土していることから、高島式土器の影響が長門に及んでいたことが知られているが、周防西部においても一定の影響を与えていたであろう。

さて、吉田遺跡出土の高杯口縁部を見ると、高島式よりも古く位置づけられるAタイプが2点、高島式と近似するBタイプが4点、高島式土器よりも新しいCタイプが2点見られる。よって、吉田遺跡出土土器は高島遺跡第2遺構とほぼ同時期の資料が主体であり、A、Cタイプを含むことから、前後の段階の資料を若干含むものと考えられる。

次に終末期Ⅰ期からⅡ期にかけての高杯の変遷について述べたい。筆者これまで上記について、口縁部が長くなることを重視してきた。しかし、終末期Ⅱ期に位置づけられる山口市朝田墳墓群Ⅷ地区SK9(小南ほか2009)からは、Cタイプと見られるもの(図118-11・12)とともに、短い口縁部を持つが、屈曲が緩やかなもの(図118-9・10)が出土している。本稿ではこれらをDタイプと仮称しておく。以上から、前述した傾向はあるものの、高杯の口縁部が全て長くなるわけではなく、屈曲が失われていくことが重要な指標になると考えられる。今回、上記の変遷観に基づき、前稿で終末期Ⅰ期に位置づけた防府市下右田遺跡SD240出土土器については、終末期Ⅰ~Ⅱ期の時間幅を持つ資料ととらえ、下関市柳瀬遺跡D地区LS001出土土器(濱崎1997)、下関市吉永遺跡Ⅲ-東地区SB-6出土土器(西田ほか1999)については終末期Ⅱ期に位置づけを変更したい。

続いて、この段階の土器の概要について述べる。複合口縁壺は梅木氏の分類(梅木1996b)を参考にすると、頸部が長いもの(図119-25~28)と短いもの(図119-29)に大別できる。以下では前者をA類、後者をB類と仮称する。口縁部は無文か、波状文・鋸歯文等を施す。また、頸部に沈線を持つものはほとんどなく、無文か貼付突帯を持つものが主体となる。なお、現時点ではA類のうち、長く直立した頸部を持つ「佐波型」複合口縁壺(図119-28・山本1979)はこの段階に位置づけられる。ただし、直立した頸部を持つ複合口縁壺は長門、周防東部で後期Ⅱ-1期から見られるため、出現時期はさらに遡る可能性がある。また、完形品がほとんどないため、識別基準及びその定義内容について今後の検討が必要である。「佐波型」複合口縁壺の成立には下大隈式の影響を考える説があるが(岩崎2008)、頸胴部の形態から、長頸壺や器台、周防東部・松山平野に見られる「細長頸複合口縁壺」(梅木2002)の影響を受けた可能性も考慮すべきであろう。下右田遺跡出土の複合口縁壺を見ると、「佐波型」複合口縁壺を含め、①口縁部を折り曲げることが少ない、②頸部は無文か断面三角形の貼付突帯を持つ、③平底が

– 269 –

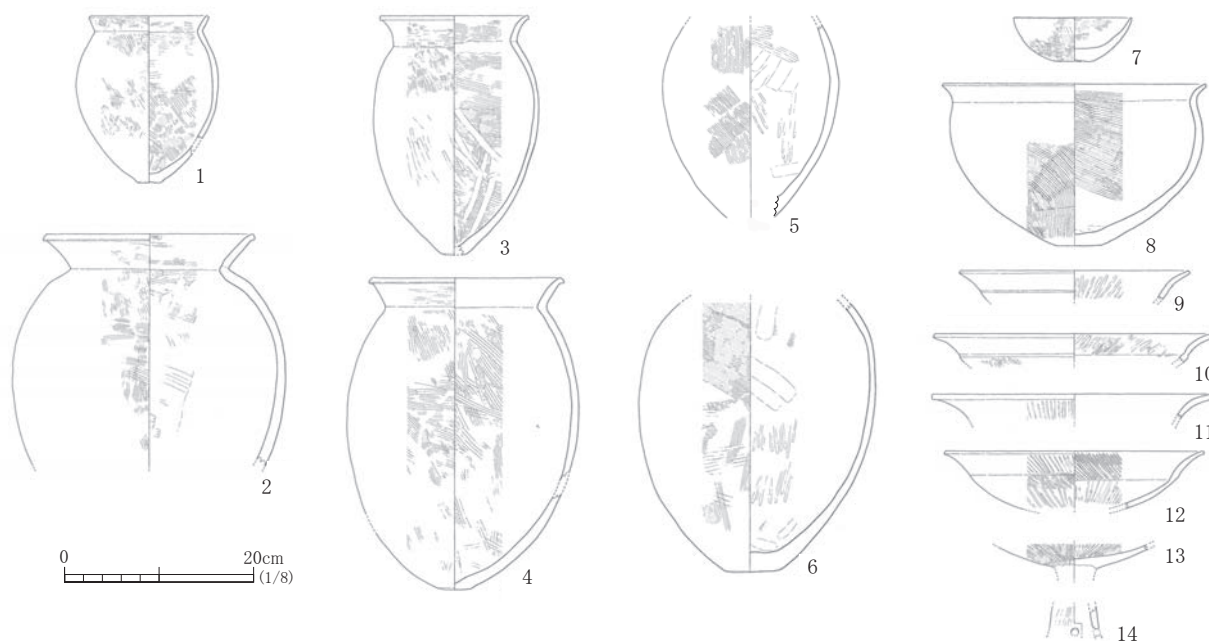


図 118 朝田墳墓群Ⅶ地区SK9出土土器（小南ほか 2009 より抜粋・一部改変）

多いという特徴があり、後述する周防東部の複合口縁壺とは様相が異なっている。下右田遺跡は終末期Ⅰ～Ⅱ期の溝や竪穴住居跡が多数検出された山口県最大級の集落跡であることから、上記の特徴は佐波川下流域で共通する地域色と考えられる。この段階においては、山口盆地で高島式系の複合口縁壺、佐波川下流域では下右田遺跡を中心として「佐波型」複合口縁壺が分布していたと見られるが、地理的環境から西新町式系、周防東部系のものを含め、複数系譜の複合口縁壺が併存し、小地域により土器様相が異なっていた可能性が高い。

甕は短い口縁部を持ち、肩の張る胴部を持つもの（図119-32・33）がある。また、胴部中位以下に最大径を持つ甕（図119-34）もこの段階には出現している。ただし、周防東部のように口縁部が舌状に長くなるものは少ない。いずれも胴部外面はハケ、内面には荒いケズリが施される。

鉢は直口のもの（図119-35）と「く」の字口縁を持ち、肩部が張るもの（図119-36）があり、小型品は丸底化が進行する。高杯は前述したBタイプ（図117-17・図119-37）がこの段階に位置づけられる。その他、豊前系高杯（図119-39）も見られる。大型器台（図119-42）はこの段階から次段階にかけて存在するが、周防東部の状況から出現時期は後期Ⅱ-2期に遡る可能性が高い。支脚には角状突起を持つもの（図119-45）、受部が「U」字状に傾斜するもの（図119-46）等があり、前者はこの段階から出現する。

終末期Ⅱ期

前段階と比較して壺・甕・鉢の胴部下半の膨らみが増し、丸底化が進行する段階である。ただし、周防東部と比較して一定量平底が残る傾向がある。朝田墳墓群Ⅶ地区SK9出土土器（小南2009）を基準資料とする。また、胴部・底部形態が近似する朝田墳墓群Ⅱ地区SB10出土土器（中村ほか1983）、高杯の形態から朝田墳墓群Ⅴ地区3区A・B群（村岡ほか1986）もこの段階に位置づける。下右田遺跡SD240出土土器もこの段階の土器を含む。

複合口縁壺は資料不足により状況が不明確であるが、下右田遺跡SD240出土土器からA類は「佐波型」を含めて頸部が短くなると推測される。また、周防東部系のB類が増加すると推測される。

甕は短い口縁部に肩の張る胴部を持つもの（図118-2）と、口縁部がやや長く、胴部中位以下に最

大径を持つもの(図118-3・4)がある。内外面の調整はハケメが主体であるが、外面にタタキを残すものも見られる(図118-6)。また、下右田遺跡SD240出土土器には内面にケズリを施すものもある。全体的に小さな平底を持つものが多い。

鉢は直口のもの(図118-7)と「く」の字口縁のもの(図118-8)がある。高杯は前述した通り、C・Dタイプが見られる(図118-9～12)。器台・支脚も前段階に引き続き存在すると考えられる。

古墳前期Ⅰ期

畿内系土器が出現する段階である。山口市湯田楠木町遺跡土器捨て場出土土器^{註10}(内田1975・田畑2012)、山口市赤妻遺跡SB2出土土器(増野ほか1990)を基準資料とする。また、朝田墳墓群Ⅲ-B地区2号壺棺(中村ほか1979)、朝田墳墓群Ⅴ地区3区C群出土土器(村岡ほか1986)、山口市上ノ山古墳群台上墓出土土器(植崎ほか1994)もこの段階に位置づけられる。

湯田楠木町遺跡土器捨て場出土土器は主に畿内系の土器で構成され、他には在来系の甕(図119-65)、少量の山陰系土器が見られるに過ぎない。壺には二重口縁壺(図119-58)、直口壺(図119-61・62)、広口壺(図119-63)がある。甕には布留系甕(図119-66)、伝統的V様式系甕(図119-67・68)がある。このほか、図示していないが、山陰系甕も少量見られる。鉢には口縁部が内湾ぎみに立ち上がるもの(図119-70)、小型丸底鉢(図119-71)、直口で外面にタタキを残すもの(図119-72)がある。高杯は布留系の高杯(図119-75・76)、伝統的V様式系高杯(図119-77)、小型高杯(図119-78)がある。器台には、小型器台(図119-79)、山陰系鼓形器台(図119-80)がある。以上の土器は畿内の布留0式後半から布留1式前半(寺沢1986)に併行する内容を持つ。なお、近似する土器を出土した山口市下東遺跡KD-4・5は首長居館の一部と推測される方形環溝であった可能性が高いと指摘されていることから(北島2011)、機内系土器の出現には政治的背景も考慮すべきであろう。一方、湯田楠木町遺跡から約1.5km東に位置する山口市白石遺跡の弥生時代終末期～古墳時代前期の土器には、山陰系土器の割合が高く(河村・古賀1992、小南2006)、土器様相に違いが見られる。この他、在来系土器が一定量を占める土器群の存在も予想される。以上の状況は、当該期における集団の交流、出自を鋭敏に反映したものと考えられ、今後も時期区分と合わせて慎重な検討が必要である。

次に在来系土器について述べる。複合口縁壺は現状でB類のみ確認できる。前段階と比較して頸部径が広がり、球胴化する(図119-60)。土器棺に使用された大型壺以外の様相は不明であるが、複合口縁壺はこの段階をもって消滅すると考えられる。その他、壺には長頸壺(図119-64)がある。在来系高杯の口縁部は屈曲がほぼなくなり、内湾ぎみに立ち上がる(図119-73・74)。恐らく布留系高杯の影響を受けたものと考えられる。以上の在来系土器の様相には不明な点が多い。

5. 周防東部の編年

中期末

田布施町明地遺跡SK01出土土器(岩崎1994・梅木2004a)、周南市小谷遺跡SB05・10出土土器(小野ほか1995)を基準資料とする。明地遺跡SK01からは伊予型高杯が出土しており、中予地域との併行関係が確認できる資料である(梅木2004a)。小谷遺跡SB05・10出土土器は垂下口縁壺等の在来系土器と須玖Ⅱ式新段階から高三瀨式古段階の須玖系土器から構成される。現時点で須玖系土器がまとまって出土する遺跡の東限である。甕の胴部が強く張り出すものが見られるため、明地遺跡SK01出土土器よりもやや後出する資料と見られる。

後期Ⅰ－１期

垂下口縁壺が衰退・消滅し、瀬戸内系土器の存在が顕著となる段階である。柳井市中院遺跡SD1出土土器を基準資料とする。垂下口縁壺は垂下部が小さくなったもの(図120-1)、胴部片(図120-2)が見られるにすぎず、この段階をもって消滅するものと考えられる。土器の主体は瀬戸内系土器で、拡張した口縁部に凹線文を持つもの(図120-3)、頸部に沈線を持つもの(図120-3・4)があり、無文のもの(図120-5)も少量存在する。甕は中期末の系譜を引くもので、肩部が張り、上底のものが主体である(図120-7)。内面にはケズリを施すものが多い。

鉢は直口のもの(図120-8)と「く」の字口縁を持ち、肩部が張るもの(図120-9)がある。高坏には伊予系高坏(梅木2004a)(図121-85・86)と「く」の字口縁を持つ坏部に短い脚部がつくもの(図121-87)がある。図121-85は鋤先状の口縁部に須玖系土器の影響が考えられる。一方、文様は中予地域の後期Ⅰ－１(梅木1996)の伊予型高坏と近似するが、胎土は他と変わらないことから、模倣品と考えられる(梅木2004a)。図120-86は明地遺跡SB32出土である。この遺構からは次段階の土器も出土しているが、この高坏は坏部・脚部に沈線を施す特徴から中期末から後期前半に位置づけられる(梅木2004a)。

後期Ⅰ－２期

複合口縁壺が出現するが、定型化していない段階である。周南市円光寺遺跡第4号土壇(新谷ほか1987)、岩国市郷遺跡SB302出土土器(藤田ほか2004)、周南市追迫遺跡29号住居跡出土土器(石井ほか1988)を基準資料とする。このほか、周南市石光遺跡4号段状遺構、包含層出土土器(石井ほか1990)、明地遺跡SB32出土土器(岩崎1994)の一部もこの段階の資料と考えられる。上記の資料のうち、追迫遺跡29号住居跡出土土器を新相ととらえる。また、石光遺跡包含層出土土器はやや発達した形態と見られる複合口縁壺の口縁部片を含むことから、新相までの時期幅を持つ資料ととらえる。

複合口縁壺は、複合口縁部の立ち上がりが小さく、頸部の形状が分かる2点はいずれも頸部に沈線を施している。図114-4と5を比較すると、口縁部の立ち上がりで頸部が長くなることから5が新しい傾向を持つ。ただし、頸部全面に施文すること、口縁部の立ち上がりが小さいことから、定型化した複合口縁壺とは言えない。その他、壺には瀬戸内系長頸壺(図120-13・14)、口縁部に凹線文を施す壺(図120-15)も存在する。頸部に沈線を施す壺(図120-16)、無文の壺(図120-17)には前段階と比較して、頸胴部界で明瞭に屈曲するものが見られるようになる。甕は胴部・底部形態、調整は前段階と近似するものの、口縁部を短く「く」の字状に折り曲げ、内面に明瞭な稜を持つもの(図120-19)が主体となる。また瀬戸内の影響により、口唇部に擬凹線(図120-19)、刺突文(図120-21)を施すものも見られる。新相においては、口縁部がやや長くなり、肩部の張りが弱いもの(図120-20)が出現する。

鉢は直口のもの(図120-22)と甕と同様に口縁部を短く「く」の字状に折り曲げ、内面に明瞭な稜を持つもの(図120-23)がある。高杯は全形が分かるものは少ない。図121-90は形状としては台付鉢ととらえるべきかもしれないが、文様が失われて形態が鈍重になる点で伊予系高杯の退化形態と考えられる。器台はこの段階の新相から確実に存在する。図121-92・93は器高20cm前後の中型品と見られる

後期Ⅱ－１期

定型化した複合口縁壺が出現する段階である。岩国市畑岡遺跡35号段状遺構出土土器(今地ほか1990)を基準資料とする。また、同遺跡27号段状遺構、岩国市市井木遺跡1号竪穴住居跡出土土器(石井ほか1997)もこの段階の資料ととらえる。

複合口縁壺は、現時点ではA類のみ確認でき、追迫遺跡3～5号壺棺墓(石井ほか1988)に見られるように、この段階から土器棺墓に使用されるようになる。また、口径10cm以下の小型品も存在する。なお、

特殊な複合口縁壺に中予地域にも分布する「細長頸複合口縁壺」(梅木2002)がある(図121-25)。

複合口縁壺は型式学的に、図114-6(追迫遺跡3号壺棺)のように頸部がくびれるものが古く、7(畑岡遺跡35号段状遺構)のように頸部が直立するものが新しいと考えられる。7の複合口縁部には、櫛描沈線文、波状文、頸部に櫛描沈線文、刺突文を施す。なお、中予では複合口縁部に波状文が見られるのは、次段階に併行すると考える後期Ⅱ-2期からである(梅木1996)。しかし、広島県西部(以下安芸地域)では、後期前半(安芸後期Ⅰ-2期～Ⅱ-1期)に壺の胴部に櫛描波状文が多用されていることから(伊藤1996)、その影響を受けた可能性があること、次段階の清水遺跡第1・第2環濠出土土器には頸部に多条沈線を持つ複合口縁壺が見られないことから、畑岡遺跡35号段状遺構出土土器をこの段階の新相に位置づけておきたい。単口縁の中型壺は資料がないため、様相は不明である。他に長頸壺(図120-26)、短頸壺(図120-27)がこの段階から出現する。また、畑岡遺跡27号段状遺構からは複合口縁壺の頸部と形態が共通し、上半部に多条の櫛描沈線文を施す壺が出土している。

甕は小型に上底が残るが、中型には前段階までの弥生中期の系譜を引く明瞭な上底はなくなり、わずかな上底を呈するものが主体となる(図120-28～30)。小型・中型とも肩部の張りが強いもの(図120-28・29)が主体であるが、肩部の張りが弱いもの(図120-30)が増加傾向にある。その他、前段階に引き続き、胴部に刺突文を施すものも存在する(図120-31・32)。

鉢は直口のもの(図120-33)、口縁部を「く」の字状に折り曲げるもの(図120-34・35)がある。高杯には口縁部に段を持ち屈曲するものがある(図121-94)。これは次段階に見られる鍵状口縁の高杯(図121-101)とともに、島田川上流域固有の型式と見られる^{註11}。この他、中予地域と近似した口縁部が大きく外反する高杯(図121-95)も存在する。器台は前段階に引き続き中型品が存在する(図121-96・97)。

後期Ⅱ-2期

複合口縁壺、器台が増加する段階である。畑岡遺跡29号段状遺構(今地ほか1990)、岩国市四割遺跡2号竪穴住居跡出土土器(和田ほか1991)を基準資料とする。また、岩国市清水遺跡第1環濠、第2環濠、6号土壇出土土器(石井ほか1989)もこの時期が主体の資料ととらえる。

複合口縁壺はA類に加えて、B類が出現する。B類には小型(図120-36・37)と中・大型(図120-39)がある。複合口縁部が袋状を呈するもの(図120-36)は中予地域にも見られる(梅木1996)。A・B類とも頸部に沈線を施すものは極めて少なく、無文もしくは1条の貼付突帯を持つものが多くなる。また、貼付突帯の形状は扁平となり、突帯上に斜格子文を刻むものが終末Ⅱ期にかけて主体となる。複合口縁部には波状文を施すものは多いが、沈線を持つものは少なくなる。この他、前段階に引き続き、「細長頸複合口縁壺」(図120-40)が存在する。単口縁の壺には複合口縁壺と形態が共通するもの(図120-41)が清水遺跡から多数出土しており、バリエーションに富む。甕は前段階と同じ形態のものが引き続き存在するが、胴部最大径の位置が胴部中位付近に下がるものが多くなる(図120-45)。外面はハケ、内面はケズリが施されるものが多い。

鉢は直口のもの(図120-47)、口縁部を「く」の字状に折り曲げるもの(図120-50～52)がある。後者のうち、口縁部がやや長くなり、小さな平底を持つもの(図120-51)は次段階以降に多く見られるようになる。高杯は、前述した島田川上流域独自の型式(図121-100・101)、周防で主体となる口縁部が「く」の字状に外反するものが見られる(図121-99)。後者は畑岡遺跡・清水遺跡出土土器には見られず、このことが両遺跡出土土器の位置づけを難しくしている^{註12}。図121-99は四割遺跡2号竪穴住居跡出土の高杯で、口縁部形態は前述したBタイプに近似する。しかし、裾部が内湾せずに広がる形状が中予地域の高杯に近似することから、中予地域の影響を受けた高杯と考えられる。この段階に併行する中予地域の

高杯には口縁部が「く」の字状に外反するが、高島式土器の高杯よりも外反度の強いものが見られ(梅木1996b)、近似した高杯として松山市桑原田中遺跡SK1出土土器(松村1992第107図25)が挙げられる。この他、高杯には豊前系(図121-98)も存在する。

器台には小型(図121-102)のほか、大型器台(図121-103~105)があり、現時点で後者はこの段階から存在が確認できる。大型器台のうち、図121-106のように胴部に突帯を持つものは周防独自の特徴であるが(松村2008)、器台の口縁部~頸部の形態は複合口縁壺B類と近似している。複合口縁壺B類及び頸部に斜格子文を刻む扁平な貼付突帯が後期Ⅱ-2期に出現することから、このタイプの大型器台の出現時期は後期Ⅱ-2期が上限になると考えられる。なお、追迫遺跡2号、22号住居跡出土の器台はこの段階から終末Ⅰ期、畑岡遺跡22号段状遺構出土の器台はこの段階に属する¹³と考える。支脚はこの段階から受部に突起を持つもの(図121-107)が出現する。

終末期Ⅰ期

清水遺跡9号段状遺構、清水遺跡2号住居跡、清水遺跡12号住居跡(石井ほか1989)、追迫遺跡2号住居跡(今地ほか1990)出土土器を古相、「吹越式」の標識資料とされている平生町吹越遺跡A地区第4号住居跡出土土器(山本ほか1972)を新相¹⁴ととらえる。

清水遺跡出土土器は従来、後期末に位置づけられることが多い資料である(乗安1990・石井2004など)。しかし、環濠埋没後、環濠埋土を掘りこむ堅穴住居跡が検出されていることから、少なくとも2時期に大別できる。また、土器には丸底化したものが一部に見られる。上記から、本稿では、環濠以外の遺構から出土した土器のうち、新しい傾向が見受けられるものを終末Ⅰ期の土器としてとらえる。これらの土器を吹越遺跡吹越遺跡A地区第4号住居跡出土土器と比較すると、丸底化が顕著な点で吹越遺跡出土土器が新しい傾向を持つ。また、清水遺跡出土土器には内面にけズリが施されるものが多いのに対して、吹越遺跡出土土器はハケメが主体であるという違いもある。ただし、吹越遺跡出土土器は各器種の量が少ないため、公表されているような土器だけで構成されていなかった可能性がある。また、前述したように高杯の型式が異なるため、清水遺跡出土土器と併行関係を詳細に検討することが難しい。このため、現状では上記のように仮に区分し、資料が増加した段階で再検討を行うのが妥当と考える。

複合口縁壺はA類、B類があるが、前段階と比較して底部が小さくなり丸底化が進行する。A類には口縁部先端を強めに折り曲げるもの(図120-54・63)も見られる¹⁵。図120-63は吹越遺跡3号住居跡出土であるが、この段階に属するものと考えられる(乗安1990)。これに近似した口縁部片は平生町松尾遺跡1号住居跡(山口大学人文学部考古学研究室1984)、下松市宮原遺跡7号住居跡(山口県教育委員会1973)からも出土しており、終末期Ⅱ期にかけて存在する。また、この壺は豊後の後期Ⅲ期からⅣ期の壺に類似しているとの指摘もあり(田崎1996a)、豊後との関連にも注意が必要である。A・B類の比率は不明であるが、B類が多くなる。終末期Ⅰ期からⅡ期のB類は周防西部にも分布するほか、長門においても土井ヶ浜Ⅳ式(坪井1968)、突抜遺跡Ⅱ地区DW-4出土土器(渡辺1985)にも見られ、広く分布する。その他、複合口縁壺と形態が共通する単口縁の壺(図120-65・66)、長頸壺(図120-56)も見られる。

甕は胴部最大径の位置が胴部中位にあり、新相になるにつれて長胴化・丸底化が進行し、口縁部は舌状に長くなる(図120-68)。一方で口縁部を短く折り曲げるものも存在する(図120-57)。

鉢は直口のもの(図120-59)、口縁部を「く」の字状に折り曲げるもの(図120-60~62)がある。高杯のうち、口縁部が「く」の字状に外反する高杯は、前段階と比較して口縁部が長くなるCタイプとなり、新相では口縁部の外反度が強くなる(図121-113)。図121-113は小田富士雄氏が指摘するように裾部形態が内湾傾向にあることから(小田1976)、高島式土器の影響を受けたものと考えられる。島田川上流

域に見られる鍵状口縁の高杯(図121-109)は前段階と比較して口縁部が緩やかに外反し、坏部が深くなるが、これは口縁部が「く」の字状に外反する高杯の影響であろう。その他、椀状の坏部に低い脚部を持つもの(図121-112)がある。

器台は相伴土器が少ないため、詳細に時期を絞り込めないものが多いが、前段階に引き続き盛行していると見られる。支脚は受部に突起を持つもの(図121-111)・持たないもの(図121-114)がある。なお、周防西部で多く見られる角状突起を持つ支脚の存在は未確認である。

終末期Ⅱ期

前段階と比較して壺・甕・鉢の胴部下半の膨らみが増し、丸底化が進行する段階である。柳井市吉政遺跡SB06・09出土土器(豊島ほか1996)、周南市岡山遺跡Ⅱ地区第2号台状墓、第3号台状墓2号主体出土土器(河島ほか1987)を基準資料とする。複合口縁壺と高坏の出土量が少ないため、基準資料には加えなかったが、光市林遺跡SB-6出土土器(尾崎ほか1993)、宮原遺跡7号住居跡出土土器(山口県教育委員会1973)もこの段階に位置づけられると考える。

複合口縁壺はB類が主体のようである。甕の様相は不明確であるが、胴部最大径の位置が胴部中位以下にあり、前段階と同様、口縁部の短いもの(図120-75)と長いもの(図120-76)がある。75は風化が激しく、内外面の調整がはつきりしない。76は口縁部の残存箇所が少なく、図のように内湾する箇所と直線的に外反する箇所があり、底部付近にはタキが残る。鉢は直口のもの(図120-77)、口縁部を「く」の字状に折り曲げるもの(図120-78~80)がある。高杯は前段階同様、Cタイプであるが、口縁部が長くなり、屈曲が緩くなる(図121-115)。また、脚部が中実の伝統的V様式系高杯がある(図121-115)。器台は引き続き存在する(図121-117)。支脚は出土例が少ないため、詳細は不明である。宮原遺跡7号住居跡では角状突起を持つ支脚が出土している。

古墳前期Ⅰ期

畿内系土器が出現する段階である。現時点では、布留0式から1式前半の時期幅でしかとらえることができない。追迫遺跡32・34号出土土器(石井ほか1988)を基準資料とするが、土器量は少ない。また、田布施町上段遺跡からはこの段階の壺棺墓が検出されている(図120-81・谷口1994)。

複合口縁壺は球胴化し、この段階をもって消滅する。小・中型壺の様相は不明である。畿内系土器には、二重口縁壺(図120-82)、伝統的V様式系甕(図120-83)、小型鉢の胴~底部(図120-84)、高杯脚部(図120-118)がある。他遺跡から布留系甕も出土しているが、遺構に伴う良好な資料に欠けるため、詳細は不明である。恐らく周防西部の湯田楠木町遺跡土器捨て場出土土器に近似した土器群が存在するものと推測する。また、在来系土器の様相には不明な点が多いが、終末期Ⅱ期に近似した土器の存在が予想される。なお、林遺跡SB3・4(尾崎ほか1993)からは次段階、布留1式後半に位置づけられる小型丸底壺、布留系甕が出土している。

6. まとめ

以上、周防西部と東部の弥生時代後期から古墳時代初頭の土器編年案を提示した。終わりに周防と関連が深い北部九州と中予地域との併行関係、周防の土器の特徴について簡潔に述べてまとめとした。併行関係については表19・20のように考えている。

後期Ⅰ-1期

この段階は伊予系高坏の存在から、中予地域の後期Ⅰ-1期に併行する。北部九州と併行関係を知る資料はないが、前後の併行関係から高三瀨式新段階の前半に併行すると考える。

後期Ⅰ－Ⅱ期

周防西部の北部九州系の壺の形態から、高三瀦式新段階(後半)に併行すると考える。また瀬戸内系長頸壺から岡山県の後期Ⅰ－Ⅱ期、前段階の併行関係と瀬戸内系土器が見られる点から中予地域の後期Ⅰ－Ⅱ期と併行すると考える。

後期Ⅱ－Ⅰ期

定型化した複合口縁壺が成立し、複合口縁部、頸部に多条沈線を持つ点から中予地域の後期Ⅱ－Ⅰ期に併行すると考えられる。周防西部では良好な資料がなく、北部九州との併行関係を知る資料はないが、前後の併行関係から、下大隈式古段階に併行すると考えられる。長門では船頭遺跡Ⅴ地区SD24(谷口ほか1995)から下大隈式古段階併行の複合口縁壺が出土している。

後期Ⅱ－Ⅱ期

複合口縁壺の頸部に沈線を持つものが極めて少なくなり、頸部は無文か1条の貼付突帯を持つものが主体となること、複合口縁部が短く袋状を呈するもの(図120-36)が出現する点が共通することから(梅木1996a)、中予地域の後期Ⅱ－Ⅱ期に併行すると考えられる。なお、袋状口縁の壺は、豊後においてもこの段階に併行すると見られる後期Ⅲ期に出現する(壺根2010)。この壺の出自は不明であるが、周防灘沿岸ではほぼ同時期に出現している点が注目される。

また、大型器台の存在が確認できるのはこの段階から終末期Ⅱ期にかけてであり、伊予との密接な関係がうかがえる。周防西部では良好な資料がないが、高島式土器に近似した高杯の形態から、下大隈式新段階に併行すると考える。ただし、中予地域の高杯には高島式土器の高杯と同様、口縁部が「く」の字状に外反するが、高島式土器の高杯よりも外反度の強いものが見られるため、周防東部の資料では注意が必要である。

終末期Ⅰ期

周防西部では、高島式土器に近似した土器から西新町式古段階に併行すると考えられる。中予地域と直接の併行関係を知る資料はないが、複合口縁壺はB類が主体となること、周防西部では受部に角状突起を持つ支脚が出現する点が共通することから、後期Ⅲ－Ⅰ期に併行すると考えられる。ただし、豊前・中予地域の終末Ⅰ期からⅡ期の甕には胴部外面にタタキを残す甕が見られるのに対し、周防では外面調整はハケメが主体でタタキを残すものは少ない。

終末期Ⅱ期

高杯の形態から、西新町式新段階に併行すると考えられる。また、前後の併行関係から伊予の後期Ⅲ－Ⅱ期に併行すると考えられる。

古墳前期Ⅰ期

畿内系土器が出現する段階であるが、現状では布留0式から1式前半の幅でしかとらえられる資料がない。北部九州の有田式古段階、中予地域の後期Ⅲ－Ⅲ期に併行すると考えられる。在来系土器では終末期Ⅱ期と近似した土器群の存在が推測される。

周防の土器の特徴

周防では後期Ⅰ－Ⅰ期に瀬戸内系土器の存在が顕著となる。瀬戸内系土器には模倣品も見られるが、壺・甕とも搬入品が認められることから、一定程度の人の移住が行われた可能性を指摘できる。そして後期Ⅰ－Ⅱ期には北部九州の影響を受けつつ、瀬戸内系長頸壺をベースに複合口縁壺が出現する。以後、周防西部では土器様相に不明な点が多いが、北部九州・瀬戸内の影響を受けていたと見られ、終末期Ⅰ期までには下右田遺跡を中心として「佐波型複合口縁壺」が出現する。一方、周防東部では

中予地域と土器の特徴が共通する点が多い。

しかし、周防全域において、終末期Ⅰ期からⅡ期の甕外面の最終調整はハケを施すことを原則としており、中予地域と比較してタタキを残すことは少ない。また、後期Ⅱ－Ⅰ期から終末期Ⅰ期の甕の内面調整は、同時期中予地域ではハケメを施すものが主体であるのに対して、周防ではケズリを施すものが多く、安芸地域の影響が考えられる。高杯においては、周防全域で豊前系(内湾口縁)が分布するほか、「く」の字口縁高杯には高島式土器と口縁部形態・変遷が近似したものが見られる。以上、東西隣接地域の影響を受けながらも、周防内で共通する特徴を保持していたことは、周防の弥生後期から古墳時代初頭の社会の動向を知る上でも重要であろう。

謝辞

本稿執筆にあたっては下記の諸氏・諸先生・諸機関にお世話になりました。末筆ながら記して感謝いたします。

梅木謙一、梅崎恵司、河合忍、久住猛雄、古賀信幸、小南裕一、田崎博之、中川寧、中村友博、西岡義貴、乗安和二三、松岡睦彦、村田裕一、山本一朗、岩国市教育委員会、下関市教育委員会、防府市教育委員会、山口市教育委員会、山口市史編さん室、山口県埋蔵文化財センター、山口大学人文学部考古学研究室

[註]

- 1) 豊後では、近年、坪根伸也氏が後期Ⅴ期(坪根1996)を土師器Ⅰa期、Ⅱa期に細分している(坪根2007・2010)。
- 2) 例えば、福岡県宮若市小原遺跡1号貯蔵穴出土資料について、田崎博之氏(田崎1998)は須玖Ⅱ式新段階と高三瀬式古段階の共存資料であるとするが、梅崎恵司氏(梅崎2005)は須玖Ⅱ式新段階に位置づけている。
- 3) 筆者は田畑2001b等で内折口縁壺を「内接口縁壺」と誤記していた。この場を借りて深くお詫び申し上げたい。
- 4) 現在、山本一朗氏は袋状口縁壺を複合口縁壺の起源と考えている(山本2005)。
- 5) 備後地域では長頸壺はⅤ－Ⅰ様式を通じて散見されるが、主要な形態ではないとされる(伊藤1992)。ただし、備後北部では近似した形態の壺(備後北部Ⅴ－Ⅰ様式:493)が存在する。同地域は山陰地方の影響が強いため、周防の瀬戸内系長頸壺にも山陰地方の影響を考慮すべきかもしれない。かつて山本一朗氏により「周防型複合口縁壺形成初期にもっとも大きな影響を及ぼしたのは、山陰・中部瀬戸内の要素であった」との指摘もある(山本1979)。詳細は今後の検討が必要であろう。
- 6) この点については河合忍氏のご教示を得た。
- 7) 高杯の類似等については、梅崎恵司氏らからご教示を受けた。高島式土器は豊前の後期後半から終末期前半に位置づけられている(田崎1996c)。
- 8) ただし、長門の遺構一括資料の大半では高杯が1点以下しか出土していないため、詳細は今後の検討が必要である。
- 9) 「右田・一丁田遺跡」は、現在は下右田遺跡に含まれている。「佐波型複合口縁壺」が出土したA－Ⅰ溝出土土器は、掲載された図を見る限り、高杯はBタイプが主体であることから概ね終末期Ⅰ期に位置づけられると考えている。
- 10) 以前筆者は、山口市教育委員会のご厚意で湯田楠木町遺跡土器捨て場跡出土土器を再実測を行ったが(田畑2000)、その段階では出土土器の半数以上が行方不明であった。しかし、その後残りの土器が山口市の収蔵庫で発見され、「山口市史」編さん事業で再整理を行った結果、既報告資料と多数接合することが判明した。このため、大半の土器について同事業により再実測が行われた(田畑2012)。また、概報により、土器捨て場跡出土土器には6世紀後半から7世紀前半の須恵器坏なども含まれることが判明していたが(内田1975)、再整理の結果、須恵器甕の胴部片や5～7世紀頃の土師器も含まれていることが判明した。このため、現在では、筆者が在系系甕とした土器には時期が下るものが含まれるものと認識している。再整理結果や田畑

2000との対応関係等については別稿で述べることにしたい。

- 11) 口縁部に段を持つ点では瀬戸内の影響が考えられる。畑岡遺跡2・3号住居跡からは、裾部に段を持つ瀬戸内系の高杯が出土している点にも注意が必要であろう。
- 12) よく取り上げられる清水遺跡第1環濠出土の高杯(石井ほか1989・15図77)は、報告書図版49からも分かるように口縁部形態が一樣ではないことから、口縁部に段を持ち屈曲する高杯(図121-94)と「く」の字状口縁の高杯との折衷品と考えられる。
- 13) 追迫遺跡2号、22号住居跡からは鋸歯文を施した複合口縁壺の口縁部片が出土している。中予地域では鋸歯文(梅木氏:三角文)は後期Ⅱ-2期から後期Ⅲ-2期にかけて見られる(梅木1996)。筆者は、周防においても同じ状況が認められると考える。よって、前後の資料を若干含む可能性はあるが、追迫遺跡2号、22号住居跡を後期Ⅱ-2期の資料ととらえ、追迫遺跡22号住居跡出土土器は前稿(田畑2006)の位置づけを変更する。畑岡遺跡22号段状遺構については、袋状口縁を持つ壺が共存していることを判断の根拠とした。
- 14) 他に周防東部における弥生時代終末期の遺構出土資料としては、松尾遺跡1号住居跡出土土器(山口大学文学部考古学研究室(1984))があるが、実見させていただいたところ、終末期Ⅰ～Ⅱ期の土器を含んでいることを確認したため、時期幅を持つ資料ととらえている。
- 15) 土器を実見し、報告書掲載図よりも口縁部先端が長く強めに折り曲げられていることを確認した。報告書(石井ほか1989)図版63でも確認できる。
- 16) 坪根伸也氏により、「頸部が大きくひらき、口縁端が外反する点で、豊後のものと類似する」とコメントされている。
- 17) 吉政遺跡SB11からは畿内系小型高杯の脚部が出土していることから、筆者が終末期Ⅱ期に位置づけた土器の一部は古墳前期Ⅰ期の土器を含む可能性がある。

参考文献

- 石井龍彦(2000)「山口県西部の弥生時代後期後半～古墳時代初頭の土器について」山口県埋蔵文化財センター(編)『陶埴』第13号,山口
- 石井龍彦(2004)「山口県東部(周防)の弥生時代後期の土器について」山口県埋蔵文化財センター(編)『陶埴』第17号,山口
- 石井龍彦(2004)「周防部の弥生後期前葉の土器についてー郷遺跡出土土器をめぐって」水島稔夫追悼集刊行会(編)『海峡の地域史ー水島稔夫追悼集ー』,下関(山口)
- 伊藤実(1992)「備後地域」正岡睦夫・松本岩雄(編)『弥生土器の様式と編年ー山陽・山陰編ー』,木耳社,東京
- 伊藤実(1996)「安芸」古代学協会四国支部(編)『古代学協会四国支部松山大会資料 弥生後期の瀬戸内海』,松山(愛媛)
- 伊藤実(2001)「安芸(西条盆地)地域の庄内期の土器様相」庄内式土器研究会(編)『庄内式土器研究X V』,八尾(大阪)
- 岩崎仁志(2008)「第四編第五章第二節 土器にみる文化の交流」山口県(編)『山口県史』通史編 原始・古代,山口
- 梅木謙一(1996a)「複合口縁壺の動態ー西部瀬戸内における地域圏の成立と展開ー」古代学協会四国支部(編)『古代学協会四国支部松山大会資料 弥生後期の瀬戸内海』,松山(愛媛)
- 梅木謙一(1996b)「伊予」古代学協会四国支部(編)『古代学協会四国支部松山大会資料 弥生後期の瀬戸内海』,松山(愛媛)
- 梅木謙一(2000)「伊予中部地域」菅原康夫・梅木謙一(編)『弥生土器の様式と編年ー四国編ー』,木耳社,東京
- 梅木謙一(2001)「伊予中部の土器」庄内式土器研究会(編)『庄内式土器研究X IV』,八尾(大阪)
- 梅木謙一(2002)「伊予・周防出土の細長頸複合口縁壺について」山口考古学会(編)『山口考古』第22号,山口
- 梅木謙一(2004a)「周防出土の伊予型高杯」水島稔夫追悼集刊行会(編)『海峡の地域史ー水島稔夫追悼集ー』,下関(山口)
- 梅木謙一(2004b)「四国の弥生中期中葉～後期前葉の土器」埋蔵文化財研究会(編)『第53回埋蔵文化財研究集会弥生中期土器の併行関係 発表要旨集』,福岡
- 梅崎恵司(1996)「東北部九州ー北豊前」古代学協会四国支部(編)『古代学協会四国支部松山大会資料 弥生後期の瀬戸内海』,松山(愛媛)

- 梅崎恵司(2005)「東北部九州の弥生時代中期から後期前半の土器－須玖式土器の終焉－」『(財)北九州市芸術文化振興財団埋蔵文化財調査室研究紀要』第19号,小倉(福岡)
- 小田富士雄(1976)『高島遺跡』北九州市埋蔵文化財調査会,小倉(福岡)
- 北島大輔(2011)「山口における古墳出現期の首長居館－下東遺跡の方形環溝と朝田墳墓群－」『第160回九州古文化研究会発表資料』
- 久住猛雄(1999)「北部九州における庄内式併行期の土器様相」庄内式土器研究会(編)『庄内式土器研究XIX』,八尾(大阪)
- 瀬尾周三(1992)「安芸地域」正岡睦夫・松本岩雄(編)『弥生土器の様式と編年－山陽・山陰編－』,木耳社,東京
- 武末純一(1982)「北九州における弥生時代の複合口縁壺」森貞次郎博士古稀記念論文集刊行会(編)『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』,福岡
- 田崎博之(1996a)「基礎資料:各地域における弥生時代後期土器の様相」古代学協会四国支部(編)『古代学協会四国支部松山大会資料 弥生後期の瀬戸内海』,松山(愛媛)
- 田崎博之(1996b)「筑前」古代学協会四国支部(編)『古代学協会四国支部松山大会資料 弥生後期の瀬戸内海』,松山(愛媛)
- 田崎博之(1996c)「南豊前」古代学協会四国支部(編)『古代学協会四国支部松山大会資料 弥生後期の瀬戸内海』,松山(愛媛)
- 田崎博之(1998)「IV 九州系の土器からみた凹線文系土器の時間的位置」下條信行(編)『日本における石器から鉄器への転換形態の研究』,松山(愛媛)
- 田畑直彦(2000)「付篇Ⅲ 山口市湯田楠木町遺跡出土の古式土師器」山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年XIV』,山口
- 田畑直彦ほか(2001a)『上東遺跡弥生時代遺物編』(山口市埋蔵文化財調査報告第77集 山口市教育委員会(編)),山口
- 田畑直彦(2001b)「周防・長門における庄内式併行期の土器様相」庄内式土器研究会(編)『庄内式土器研究XXV』,八尾(大阪)
- 田畑直彦(2004)「周防・長門における弥生中期の土器と並行関係」埋蔵文化財研究会(編)『第53回埋蔵文化財研究集会弥生中期土器の併行関係発表要旨集』,福岡
- 田畑直彦(2006)「山口県島田川流域の弥生集落－中流域遺跡群を中心として－」日本考古学協会2006年度愛媛大会実行委員会(編)『日本考古学協会2006年度愛媛大会研究発表資料集』,松山(愛媛)
- 坪井清足(1968)「山口県豊浦郡豊北町土井が浜遺跡の土器」小林行雄・杉原莊介編『弥生式土器集成資料編』日本考古学協会,東京
- 坪根伸也(1996)「豊後」古代学協会四国支部(編)『古代学協会四国支部松山大会資料 弥生後期の瀬戸内海』,松山(愛媛)
- 坪根伸也(2007)「第2節 下郡遺跡群の弥生時代終末期から古墳時代初頭の土器について」『下郡遺跡群V』(「大分市埋蔵文化財調査報告書」第76集 大分市教育委員会(編)),大分
- 坪根伸也(2010)「第Ⅲ章第3節(4) 弥生時代後期から古墳時代前期の土器による時期区分」『下郡遺跡群Ⅷ』(大分市埋蔵文化財調査報告書100 大分市教育委員会(編)),大分
- 寺沢薫(1986)「畿内古式土師器の編年と2・3の問題」『矢部遺跡』(奈良県史跡名勝天然記念物調査報告49 奈良県立橿原考古学研究所(編)),奈良
- 乗安和二三(1990)「山口県(防長地域)」古代学協会四国支部(編)『瀬戸内の弥生後期土器の編年と地域性』,松山(愛媛)
- 橋口達也(1979)「甕棺の編年的研究」(『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書』XXXI－中巻－ 福岡県教育委員会(編)),福岡
- 平井典子(1996)「備前・備前南部」古代学協会四国支部(編)『古代学協会四国支部松山大会資料 弥生後期の瀬戸内海』,松山(愛媛)

- 松村さを里(2008)「西部瀬戸内における弥生時代器台の展開について－伊予地方を中心に」愛媛大学考古学研究室 下條信行(編)『妙見山1号墳－西部瀬戸内における初期前方後円墳の研究』,今治(愛媛)
- 松村 淳(1992)「桑原田中遺跡」(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター(編)『桑原地区の遺跡』,松山(愛媛)
- 松本岩雄(1992)「出雲・隠岐地域」正岡睦夫・松本岩雄(編)『弥生土器の様式と編年－山陽・山陰編－』,木耳社,東京
- 本山雅子(2000)「下右田遺跡の弥生溝SD630の土器について」山口考古学会(編)『山口考古』第20号,山口
- 山本一朗(1979)「Ⅲ 防長の弥生式土器」周陽考古学研究所(編)『山口県の弥生式土器－集成と編年』,光(山口)
- 山本一朗(1981)「防長の土師器」周陽考古学研究所(編)『山口県の土師器・須恵器－集成と編年－』,光(山口)
- 山本一朗(1982)「防長複合口縁壺の系譜」考古学研究会(編)『考古学研究』第29巻第2号,岡山
- 山本一朗(1993)「山口県東部(周防)弥生後期土器編年」潮見浩先生退官記念事業会(編)『考古論集－潮見浩先生退官記念論文集』,広島
- 山本一朗(2003)「吹越式の諸問題」山口考古学会(編)『山口考古』第23号,山口
- 山本一朗(2005)「吹越式の再検討」川越哲志先生退官記念論集刊行会(編)『考古論集(川越哲志先生退官記念記念論集)』,広島
- 吉瀬勝康(1996)「周防・長門」古代学協会四国支部(編)『古代学協会四国支部松山大会資料 弥生後期の瀬戸内海』,松山(愛媛)

遺跡文献

- 赤妻遺跡 増野淳一ほか(1990)『赤妻遺跡』(山口県埋蔵文化財調査報告第132集 山口県埋蔵文化財センター(編)),山口
- 田畑直彦(2012)「赤妻遺跡」山口市(編)『山口市史 史料編 考古・古代』,山口
- 朝田墳墓群 中村徹也ほか(1979)『朝田墳墓群Ⅳ・糸米遺跡』(山口県埋蔵文化財調査報告第45集 山口県教育委員会(編)),山口
- 中村徹也ほか(1983)『朝田墳墓群Ⅵ』(山口県埋蔵文化財調査報告第69集 山口県教育委員会(編)),山口
- 村岡和雄ほか(1986)『朝田墳墓群Ⅶ』(山口県埋蔵文化財調査報告第89集 山口県教育委員会(編)),山口
- 小南裕一ほか(2009)『朝田墳墓群Ⅷ』(山口県埋蔵文化財センター調査報告第71集 山口県埋蔵文化財センター(編)),山口
- 石光遺跡 小野忠熙(1953)「第Ⅳ章第2節2熊毛郡三丘村大字小松原石光遺跡」山口大学島田川遺跡学術調査団『島田川 周防島田川流域の遺跡調査研究報告』,山口
- 石井龍彦ほか(1990)『石光遺跡』(山口県埋蔵文化財調査報告第124集 山口県埋蔵文化財センター(編)),山口
- 市井木遺跡 石井龍彦ほか(1997)『市井木遺跡』(玖珂町埋蔵文化財調査報告第3集 山口県埋蔵文化財センター(編)),玖珂(山口)
- 上段遺跡 谷口哲一(1994)「上段遺跡出土の壺棺葬」山口県埋蔵文化財センター(編)『陶土Ⅲ』第7号,山口
- 上の山古墳群 橋崎悦夫ほか(1994)「第2節 上の山古墳群」『庭河内遺跡 上の山古墳群』(山口県埋蔵文化財調査報告第164集 山口県埋蔵文化財センター(編)),山口
- 円光寺遺跡 新谷剣二郎ほか(1987)『円光寺遺跡』(山口県埋蔵文化財調査報告第105集 山口県埋蔵文化財センター(編)),山口
- 追迫遺跡 石井龍彦・河島清(1988)『追迫遺跡』(山口県埋蔵文化財調査報告第107集 山口県埋蔵文化財センター(編)),山口
- 岡山遺跡 河島清・前田耕次(1987)『岡山遺跡』(山口県埋蔵文化財調査報告第99集 山口県埋蔵文化財センター(編)),山口
- 奥ヶ原遺跡 和田嘉之ほか(1992)『奥ヶ原遺跡』(山口県埋蔵文化財調査報告第150集 山口県埋蔵文化財センター(編)),山口
- 郷遺跡 藤田英憲ほか(2004)『郷遺跡』(山口県埋蔵文化財センター調査報告第44集 山口県埋蔵文化財センター(編)),山口
- 小谷遺跡 小野実・藤川貴和・中野達之1995『小谷遺跡』(山口県埋蔵文化財調査報告第175集 山口県埋蔵文化財センター(編)),山口
- 清水遺跡 石井龍彦ほか(1989)『清水遺跡』(山口県埋蔵文化財調査報告第118集 山口県埋蔵文化財センター(編)),山口
- 下東遺跡 富上肇男ほか(1975)『国道9号・山口バイパス 下東遺跡 萩峠遺跡』(山口県埋蔵文化財調査報告第30集、山口県教育委員会(編)),山口
- 磯部貴文(1992)『下東遺跡Ⅱ』(山口市埋蔵文化財調査報告第48集 山口市教育委員会(編)),山口

下石田遺跡	山口県教育委員会(編)(1973)『下石田・下田遺跡―的場宮の馬場遺跡―久米市遺跡』(山口県埋蔵文化財調査報告第19集)、山口 山口県教育委員会(編)(1979)『下石田遺跡第3次調査概報』(山口県埋蔵文化財調査報告書第46集)、山口 原田光朗(1999)『下石田遺跡第9・10・13・14・15・17次発掘調査概報』防府市教育委員会(編)、防府(山口)
白石遺跡	古賀真木子(1992)「第2章 亀山橋内教育学部附属山口中学校汚水排水管布設に伴う発掘調査」山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学橋内遺跡調査研究年報X』、山口 小南裕一(2006)『白石遺跡』(山口県埋蔵文化財センター調査報告第56集 山口県埋蔵文化財センター(編))、山口
四割遺跡	和田嘉之ほか(1991)『四割遺跡』(山口県埋蔵文化財調査報告第142集 山口県埋蔵文化財センター(編))、山口
中院遺跡	西尾健司(編)(2003)『中院遺跡』(山口県埋蔵文化財センター報告第36集 山口県埋蔵文化財センター(編))、山口
天王遺跡	谷口哲一ほか(1988)『天王遺跡』(山口県埋蔵文化財調査報告第108集 山口県埋蔵文化財センター(編))、山口
畑岡遺跡	今地政紀ほか(1990)『畑岡遺跡』(山口県埋蔵文化財調査報告第125集 山口県埋蔵文化財センター(編))、山口
林遺跡	尾崎雅一・谷口哲一(1993)『林遺跡』(山口県埋蔵文化財調査報告第159集 山口県埋蔵文化財センター(編))、山口
吹越遺跡	伊藤彰ほか(1970)『高地性集落―吹越遺跡予備調査概報』平生町教育委員会、平生(山口) 山本一朗ほか(1972)『高地性集落―吹越遺跡第2次調査概報』平生町教育委員会・山口県教育委員会、平生(山口)
松尾遺跡	山口大学人文学部考古学研究室(1984)「Ⅱ 熊毛郡平生町松尾遺跡の調査」山口大学人文学部考古学研究室(編)『西部瀬川内における弥生文化の研究』、山口
真尾猪の山遺跡	谷口哲一ほか(2007)『真尾猪の山遺跡』(山口県埋蔵文化財センター報告第62集 山口県埋蔵文化財センター(編))、山口
丸山遺跡	山口市教育委員会(1982)『丸山遺跡』(山口市埋蔵文化財調査報告第17集)、山口
宮原遺跡	山口県教育委員会(1973)「宮原遺跡」『宮原遺跡・上広石遺跡』(山口県埋蔵文化財調査報告第20集)、山口
明地遺跡	岩崎仁志(1993)『明地遺跡』(山口県埋蔵文化財調査報告第162集 山口県埋蔵文化財センター(編))、山口 岩崎仁志(1994)『明地遺跡Ⅱ』(山口県埋蔵文化財調査報告第167集 山口県埋蔵文化財センター(編))、山口
湯田楠木町遺跡	内田悟(1975)『山口市宇楠木町 湯田中学校造成地湯田楠木町第1地区発掘調査概報』山口市教育委員会、山口 田畑直彦(2000)「付篇Ⅲ 山口市湯田楠木町遺跡出土の古式土師器」山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学橋内遺跡調査研究年報XⅣ』、山口 田畑直彦(2012)『湯田楠木町遺跡』山口市(編)『山口市史 史料編 考古・古代』、山口
吉田遺跡	河村吉行(1990)「吉田橋内本部2号館新営に伴う発掘調査」山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学橋内遺跡調査研究年報Ⅶ』、山口 豆谷和之(1993)「吉田遺跡第1地区A区出土の弥生時代中期後半の土器について」山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学橋内遺跡調査研究年報XⅠ』、山口
吉政遺跡	豊島政行ほか(1996)『吉政遺跡』(山口県教育財団埋蔵文化財調査報告第1集 山口県埋蔵文化財センター(編))、山口

長門の関連遺跡(本文言及遺跡に限る)

秋根遺跡	伊東照雄・山内紀嗣(編)(1977)『秋根遺跡』(下関市埋蔵文化財調査報告22 下関市教育委員会(編)、下関(山口))
川棚条里跡	藤本有紀(2000)『川棚条里跡1(大浦・台地区)』(豊浦町の文化財第17集 豊浦町教育委員会(編)、豊浦(山口))
突抜遺跡	渡辺一雄(1985)『よみがえる弥生のムラ―突抜・馬場遺跡―』(山口県埋蔵文化財調査報告第87集 山口県教育委員会・山口県埋蔵文化財センター(編)、山口)
船頭遺跡	谷口哲一ほか(1995)『船頭遺跡Ⅱ』(山口県埋蔵文化財調査報告第178集 山口県埋蔵文化財センター(編))、山口
羽場遺跡	乗安和之ほか(1989)『羽場遺跡・片山遺跡』(山口県埋蔵文化財調査穂田第121集 山口県埋蔵文化財センター(編))、山口
柳瀬遺跡	濱崎真二(1997)『柳瀬遺跡』下関市教育委員会(下関市埋蔵文化財調査報告60 下関市教育委員会(編))、下関(山口)
吉永遺跡	西山宏(編)1999『吉永遺跡(Ⅲ―東地区)』(山口県埋蔵文化財センター調査報告第10集 山口県埋蔵文化財センター(編))、山口

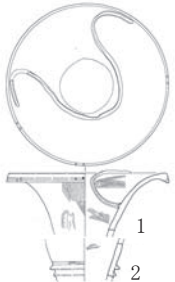
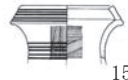
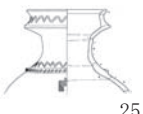
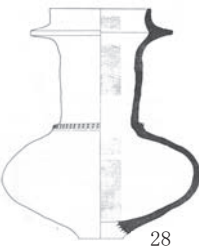
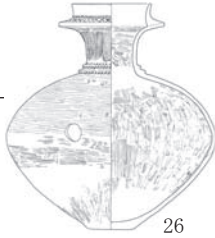
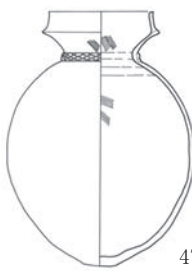
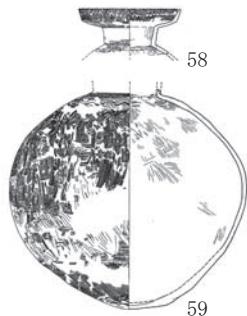
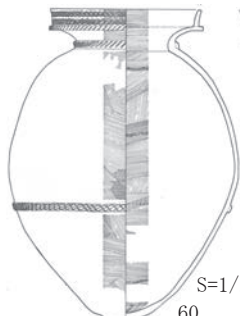
	壺
後期Ⅰ-1	    
後期Ⅰ-2	   
後期Ⅱ-1	 
後期Ⅱ-2	
終末期Ⅰ	     
終末期Ⅱ	  
古墳前期Ⅰ	      

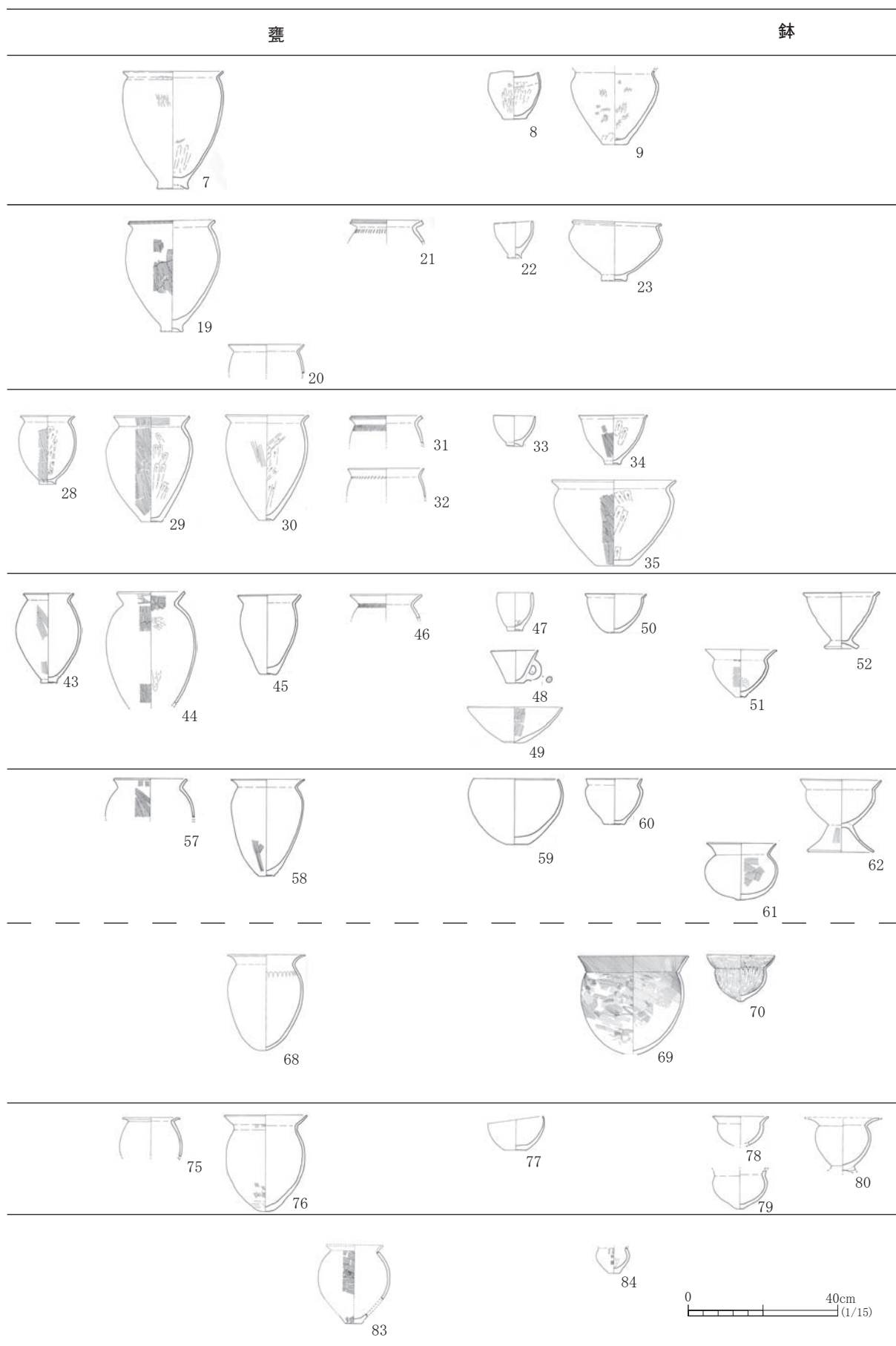
図 119 周防西部における弥生時代後期から古墳時代初



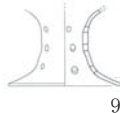
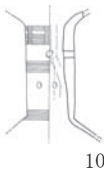
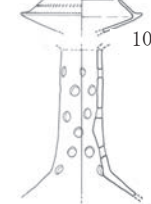
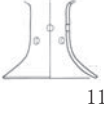
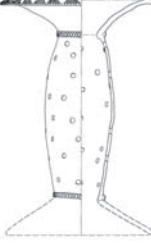
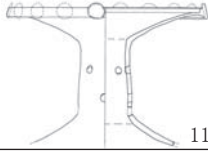
頭の土器編年図（同一期内の上下は時期差を示さない）

	壺
後期Ⅰ-1	
後期Ⅰ-2	
後期Ⅱ-1	
後期Ⅱ-2	
終末期Ⅰ	
終末期Ⅱ	
古墳前期Ⅰ	

図 120 周防東部における弥生時代後期から古墳時代初頭の土器編年図



(壺・甕・鉢) (後期 I - 2 期を除き、同一期内的上下は時期差を示さない)

	高杯	器台	支脚
後期Ⅰ-1	 85  86  87		
後期Ⅰ-2	 88  89  90  91	 92  93	
後期Ⅱ-1	 94  95	 96  97	
後期Ⅱ-2	 98  99  100  101  102  103  104  105  107		
終末期Ⅰ	 108  109  110  111  112  113  106		
終末期Ⅱ	 115  116	 117	 114
古墳前期Ⅰ	 118		

0 40cm
(1/15)

※後期Ⅰ-2期を除き、同一期内の上下は時期差を示さない

図 121 周防東部における弥生時代後期から古墳時代初頭の土器編年図（高杯・器台・支脚）

表 19 併行関係表（田崎 1996a より作成）



※() 内は『弥生土器の様式と編年（山陽山陰編）』・『同（四国編）』の編年
出雲は『弥生土器の様式と編年（山陽山陰編）』の様式編年対照表から作成

表 20 山口県における併行関係表

	長門西部	長門北部	周防西部	周防東部
中期Ⅳ	下七見第3地区SK32 宝蔵寺SK26・29	(宮ヶ久保A・E溝) (坂手沖尻溝Ⅰ)	吉田第Ⅰ地区A区ビット 下東1号溝状遺構	小谷SB05・10 明地2次SK01
後期Ⅰ-1	(柳瀬包含層)	(宮ヶ久保E溝新)	丸山1号土壇	中院SD-1
後期Ⅰ-2	塚の原LS015	(+)	下右田17次SK990 下右田13次SD221 (下右田SD630)	円光寺4号土壇 郷Ⅲ地区SB302 追迫29号住居跡
後期Ⅱ-1	吉永Ⅲ-東地区SB24 (船頭Ⅴ地区SD24)	羽場SB4・8 突抜第Ⅱ地区DW11	下右田14号住居跡	畑岡35号段状遺構
後期Ⅱ-2	下七見第24地区SB1 船頭SK18	(+)	下右田SI695	畑岡29号段状遺構 四割2号堅穴住居跡 (清水第1・2環濠)
終末期Ⅰ	(秋根LD066第Ⅲ層) 秋根LS006	突抜第Ⅱ地区DW4	(吉田2号館1号土壇) 下右田SI1030 (下右田SD240)	追迫2号住居跡 清水2・12号住居跡 清水9号段状遺構
終末期Ⅱ	柳瀬D地区LS001 吉永Ⅲ-東地区SB6 柳瀬E地区LS005	(+)	(下右田SD240) 朝田墳墓群ⅧSK9 朝田墳墓群Ⅴ地区3区B群	吹越A地区 4号住居跡
古墳前期Ⅰ	吉永Ⅲ-東地区SB3・ 58・60 下七見第Ⅱ地区SD2 武久川下流域糸里遺跡	突抜第Ⅲ地区DW25	湯田楠木町土器捨て場 朝田墳墓群Ⅴ地区3区C群 上の山古墳状墓	吉政SB06・09 岡山2号台状墓 岡山Ⅱ地区3号台状墓 2号主体

※縦幅は時間幅を示さない
() 内は時間幅のある資料

図出典

図 113 筆者作成

図 114・116～118 各報告書より転載・一部改変

図 115 1は田畑実測、他は各報告書より転載

図 119 各報告書より転載

後期Ⅰ－1 1～7 丸山遺跡第1号土壙

後期Ⅰ－2 8・10・13 下右田 SK990、9・14 下右田 SD630、11、12 下右田 SD221

後期Ⅱ－1 15 下右田第Ⅲ地区旧河川跡砂層、16～20 下右田 14号住居跡

後期Ⅱ－2 21～24 下右田 SI695

終末期Ⅰ 25、29、33～38、43 吉田本部2号館第1号土壙、26 下右田 SD240 上層、27・30～32 下右田 SI1030、
28 下右田 A－1 溝上層、39 下右田 SI1049、40～42、44 下右田 SD240 上層、45、46 下右田 SD260

終末期Ⅱ 47 朝田墳墓群第Ⅱ地区第10号竪穴住居跡、48 下右田 SD240 上層、
49～54 朝田墳墓群Ⅶ地区 SK9、55・56 朝田墳墓群Ⅴ地区3区B群、57 白石A区第5層

古墳前期Ⅰ 58・59、61～63、65～68、70～72、75～80 湯田楠木町土器捨て場、
60 朝田墳墓群Ⅲ－B地区第2号壺棺、67 赤妻 SB2、64・69 朝田墳墓群Ⅴ地区3区、
73・74 上ノ山古墳群台状墓

図 120・121 各報告書より転載・一部改変

後期Ⅰ－1 1～9、85、87 中院 SD1、86 明地 SB32

後期Ⅰ－2 10・11・17・19・22・23・88・89・90 円光寺第4号土壙、12・20・91・92・93 追迫 29号住居跡、
13・14 石光4号段状遺構、15 明地 SB32、16・18 郷 SB302、21 石光包含層

後期Ⅱ－1 24・26～28、30～35、94～97 畑岡 35号段状遺構、25、29 畑岡 27号段状遺構

後期Ⅱ－2 36・38・41・42・43・45・48・104・105 清水第1環濠、37・46・47・49・98・101・103 畑岡 29号段状遺構、
44・51・99 四割2号竪穴住居、39・40・50・52・100・102 清水第2環濠、106 天王 17号住居跡、
107 清水 6号土壙

終末期Ⅰ 53・56・57・59 清水 9号段状遺構、54・58・61・110・111 清水 12号住居跡、60・62・109 清水 2号住居跡、
55・108 追迫 2号住居跡、63 吹越A地区第3号住居跡出土土器、64～70、112、113 吹越A地区第4号住居跡、
114 松尾 1号住居跡

終末期Ⅱ 71・73・116 岡山Ⅱ地区第3号台状墓2号主体直上、72・76・79 吉政 SB09、74・75・77・78・80、
115 吉政 SB06（実測図を改変）、117 岡山Ⅱ地区第2号台状墓

古墳前期Ⅰ 81 上段1号壺棺墓、82 追迫 34号住居跡、83、84、118 追迫 32号住居跡